

「特別の教科 道徳」の授業づくりに向けた実践的検討

石黒皓大（教育実践コース）

1 はじめに

児童がこれからの社会をたくましく生き抜くには、学校生活で生じる様々な課題に対して主体的に課題解決する力を育てることが重要となる。課題の一つにいじめや児童同士のトラブルがあり、それらを解決する力を育成する教科として、「特別の教科 道徳」（以下、道徳科）がある。1年次では道徳科の授業実践にあたり、著者（以下、授業者）の課題意識と道徳科との関連、これまでの成果と課題についての文献調査を行なった。文献調査を通じて得た知見を実際の授業に導入した。授業実践を振り返り、道徳科の授業づくりで重要と感じたことを焦点化し、再度授業を実施した。

本報告書では、道徳科の目標に向け、1・2年次の授業実践において道徳科の課題解決に必要な手立てについて検討した。授業実践から見られた児童の姿、教師の働きかけや手立てより、道徳科を学ぶ価値と授業づくりの留意点について考察した。

2 先行研究のレビュー

(1) 道徳科の指導

小学校学習指導要領における道徳科の学習内容は、「児童が人間として他者とよりよく生きていく上で学ぶことが必要と考えられる道徳的価値を含む内容」「児童自らが道徳性を養うための手掛かりとなるもの」である（文部科学省，2017）。学習者との関わりという視点で、表1のようにAからDの4つに分類されている。

表1 道徳科の内容項目

A	主として自分自身に関すること 例えば、【善悪の判断、自律、自由と責任】
B	主として人との関りに関すること 例えば、【親切、思いやり】【感謝】【礼儀】
C	主として集団や社会との関りに関すること 例えば、【規則の尊重】【勤労、公共の精神】
D	主として生命や自然、崇高なものとの関りに関すること 例えば、【生命の尊さ】【自然愛護】

学習指導要領には、児童の発達的特質に応じて内容構成が重点化され、目的も変化していた。道徳科の指導では児童生徒の発達段階に十分に考慮する必要がある（押谷・立石，1991）。道徳科の内

容項目では項目同士での発展性と関連性を考慮することで、指導効果が高まると考えられる。

(2) 道徳科の授業実践上の課題

① 思考が実態に表出されない課題

道徳科の授業を通して、児童の道徳性や道徳的実践力がどれほど育成できたか、児童が自らの心の成長を実感できたかを見取るためには、学びが子どもの姿に反映する必要がある。この子どもの思考が、学びの姿や実生活に活かされていないことが課題である（山田・園田，2016）。

② 授業内容の偏りという課題

道徳教育の内容は知識的側面、価値・態度的側面、技能的側面の3つに分類できる（松下，2015）。現行の道徳科では、価値の内容が突出し、知識的側面、技能的側面の指導が不足していると考えられる。

3 1年次の授業実践

(1) 実践の背景

道徳科の授業づくりにおいて、先行研究の課題を解決する手立てを考案し、授業をデザインして実践した。

(2) 先行研究の検討

日常に活かされる知識的側面と技能的側面の指導の充実化と、学びを実態に反映するために、日常と関連付け、学習内容を自分事として捉えるように、以下の手立てを用いた。

① ジャストコミュニティ

ジャストコミュニティとは道徳科では、教師が身近な内容について児童に教えるのではなく、教師と児童で身近な内容について考えることである（荒木，2013）。ジャストコミュニティでは、児童にとって身近な内容を扱うため、自分事として捉えやすい利点がある。授業では、児童の学校生活と結びつける内容を取り扱った。

② 役割演技

役割演技とは、道徳的実践力が問われる場面において、それぞれの役割が演じられることで、実際にどのような対応が可能なのかを考える活動である（岩瀧，2009）。本研究では飯田（2020）を参考に、役割演技とは授業中に必要に応じて登場人物になりきり即興でその役を演じることと定義し

た。演じることで道徳的価値について、具体的な行動として知覚し、より深く道徳的価値を学ぶことができる」と推測した（早川，2017）。道徳的価値について体験的に学ぶ役割演技を取り入れた。

(3) 対象授業の概要

授業計画は表2の通りであった。

表2 1年次の授業計画

対 象	A小学校 第4学年児童 32名
日 時	2023年12月1日（木）10:30～11:10
内 容	「C 主として集団や社会との関わりに関すること」 (11) 規則の尊重
内容項目の目 標	約束や社会のきまりの意義を理解し、それらを守ること
授業のねらい	きまりについて、役割演技により心情を理解する活動を通して、多角的にきまりを考える。
教 材	「雨のバスでいりゅう所で」 文部科学省検定済教科書 38 光村 道徳405 小学校道徳科

児童が学習内容へ興味を持ち自分事として学習へ取り組めるよう、ジャストコミュニティとして、学校で設けられていた生活目標を取り入れた。授業冒頭で内容を確認し、学習内容への焦点化を行った。役割演技では、教材で問題となっている場面を代表児童に演じてもらった。児童の配役と演じる場面は授業者が設定したが、演技の中で発言内容は児童に任せた。

(4) 1年次の成果と課題

実践の成果は、学習内容について自由に意見を述べられるように、大きな枠組みの学習課題を設定したことであった。児童は自身の関心にもとづく学習内容を発言し、多面的・多角的に考えていた。

実践上の課題は、振り返りの時間を十分に確保できないタイムマネジメントであった。児童が学習活動を振り返り、自分の意見を再構成する時間の確保が不十分であった。座席配置と学習活動との関係も課題であった。振り返り活動は、その前のグループ活動の座席配置のままで行った。振り返りへの記述内容をグループで考える姿が多く、他者の意見をそのまま自身の振り返りに記述する児童もいた。他者参照することで、自身の考え方を深めることができなかった。まずは自分の考え方を構成できるように振り返り時の座席配置を個別にする工夫が必要であった。

研究上の課題は、ジャストコミュニティと役割演技により児童が活発になりすぎ、学習活動の円滑な進行が妨げられたことである。役割演技で演

者であったジョウ（仮名）は、役割演技終了後も興奮しており、グループワークでは全体の話に参加しなかった。同じグループのセイラ（仮名）と雑談をしていた。また、役割演技終了後の発問も課題であった。発問内容の難易度が高く発問数が多かったことで、児童は返答までの時間がかかり、周囲と相談する混乱を招いた。学習課題の設定も課題であった。道徳科で扱う課題は、条件や立場によって変化するため、授業内で解答や正解が出るものではない。解答することを授業目標にしたり満足したりするのではなく、授業終了後も継続して考えられる学習内容を設定すべきであった。

4 2年次の授業実践

(1) 2年次の実践の背景

道徳科の学びの重点の1つに多面的・多角的な思考がある（文部科学省，2017）。多面的・多角的な思考とは、物事を一面的に捉えるのではなく、児童自らが道徳的価値の理解を基に考え、様々な視点から物事を理解し、主体的に学習に取り組むことと定義される（浅見，2020）。道徳科の授業実践、特に課題解決の学習場面において、役割演技の手続きを導入し、児童の多面的・多角的な考え方を育成するための授業づくりの要素について検討した。

(2) 対象授業の概要、振り返りの評価手続き

授業計画は表3の通りであった。

表3 2年次の授業計画

対 象	A小学校 第5学年児童 32名
日 時	2024年7月3日（水）9:35～10:20
内 容	「A 主として自分自身に関すること」 (2) 正直、誠実
内容項目の目 標	誠実に、明るい心で生活すること
授業のねらい	正直について、役割演技から自分の思いに正直に行動することの意味と周囲への影響について考える活動を通して、正直に行動することの大切さを理解し、実践する意欲を育てる。
教 材	「このままでいいのかな」 文部科学省検定済教科書 38 光村 道徳514 小学校道徳科

役割演技では、教材で問題となっている場面を代表児童3名に演じてもらった。演技の中の役が3つあったため、演者の3人が3つの役割全てを演じられるように役割を交代することで、計3回役割演技を行なった。各回の役割演技の終了後、演者と聴者とを往還させ、それぞれの立場の意見を確認した。

授業終盤で本時の学習内容を振り返る活動を行った。振り返りには児童全員が道徳学習シートの「感じたこと・考えたこと」「これからどうしていきたいか」の質問項目に自由筆記した。道徳学習シートは、授業者が道徳科の学習を行うにあたり、児童が学習内容を焦点化し、見通しをもって学習を進められるように作成した。

(3) 多面的・多角的な思考の分析方法

児童が多面的・多角的に考えることができたかを検討するため、児童の振り返りへの記述内容を①KJ法による分析、②4軸による分析の2つを行った。

① KJ法による分析

KJ法とは質的データを整理しまとめるための手法である(川喜田, 1997)。KJ法を参考に、道徳学習シートの記述欄、「感じたこと・考えたこと」「これからどうしていきたいか」のそれぞれで、授業者、指導担当教員2名、大学院生1名の計4名で内容の分類、整理を行った。具体的な手続きでは、まず、児童の筆記内容を付箋用紙に書き起こした。授業者が1つひとつの付箋を読み上げ、意味を解釈し内容が近いと感じた付箋同士を大きめの模造紙の近い位置に添付した。内容の異なる付箋同士は離れた位置に添付した。全ての付箋同士の内容を検討し、模造紙に配置したあと、再度付箋同士の関係を考えて。意味内容の近い付箋同士をグループとして囲んだ。グループ同士の関係を考えて全体像を捉えた。本授業を通して児童が何を考えたのかを捉えるようにした。

② 4軸による分析

押谷(2018)の視点移動を参考に、多面的・多角的な考え方を分類する対象軸、時間軸、条件軸、本質軸の4軸を設定した。判断基準は以下のとおりである。

対象軸：相手、第三者、自分の立場等で考える。

時間軸：以前、現在、未来のこと等で考える。

条件軸：仮説や比較などで考える。

本質軸：価値の本質に関わって考える。

児童の振り返りへの筆記内容について、授業者と指導教員2名、大学院生1名で評価し、4軸それぞれに当てはまるかどうか、判断基準を用いて集計した。筆記内容が4軸のなかで、いくつの軸に当てはまっているのか、児童一人ひとりの記述内容を精査し、児童全体の割合を算出した。

(4) 分析結果

① KJ法による分析結果

「本時の学習を通して感じたこと・考えたこと」という振り返りへの記述では、『言う』『言わない』『時には嘘も必要である』『モヤモヤする』『その他』という5つのカテゴリーに大別された(図1)。また、『言う』は「正直に言う」「事実を言う」「気持ちを言う」の3つの下位カテゴリーに分類された。『モヤモヤする』は、「正直に言わないとモヤモヤする」「自分の意見を言わないとモヤモヤする」の2つの下位カテゴリーに、『その他』は「周りの意見も必要である」「ルールを変えるべきである」の2つの下位カテゴリーに分類された。「これからどうしていきたいか」という振り返りへの記述では、「正直に言いたい」「正直に言って仲を深めたい」「自分の意見を言う・持つ」「嘘と正直を使い分けたい」という4つのカテゴリーに大別された。

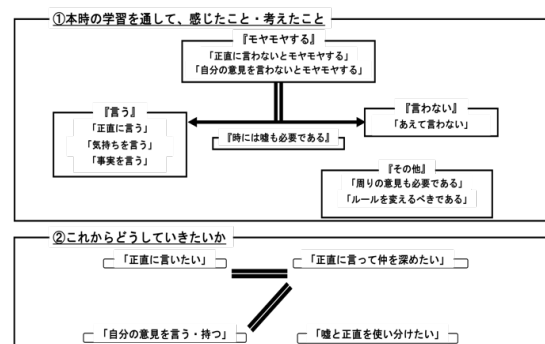


図1 KJ法の分析結果

② 4軸による分析結果

4軸のうち該当した人数が最も多かった軸は、対象軸の31名であった。条件軸と本質軸では対象軸や時間軸よりも該当する人数は少なく、道徳科の内容項目に関する本質軸が16名と最も少なかった(図2)。

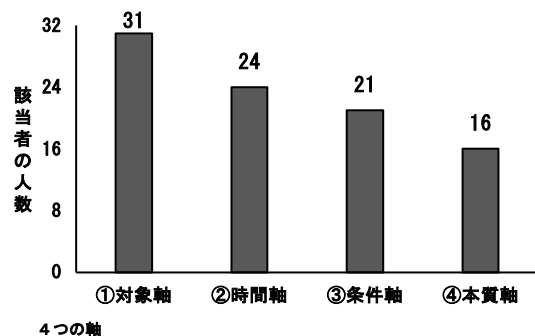


図2 4軸ごとの人数

児童の記述内容は4軸のうち、重複して3軸に当てはまるものが最も多く、全体の34.4%であった。4軸全てに当てはまるものは31.3%、2軸に当てはまるものは、25.0%、1軸のみに当てはまるものは9.4%であった(図3)。

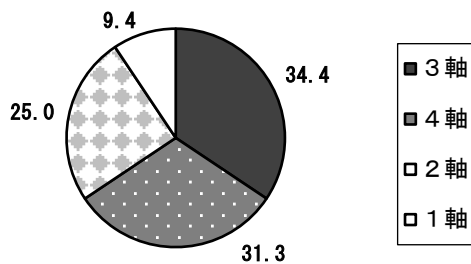


図3 4軸に適合する割合

(5) 考察

KJ 法による分析から、「正直に言うことの大切さ」という教材から現れると予想した率直な感想と、相反する「言わない」の意見に分かれていた。児童個々が多角的な視点から学んでいたことを示している。「時には嘘も必要である」の意見より、正直に言うことの大切さを理解している一方で、正直に伝えることで起こるかもしれないトラブルを回避するための嘘をつく必要があるという相反する葛藤が見られた。物事を一元的に見るのではなく、2つの意見から多面的・多角的に捉えた表れと考えられる。

4 軸による分析では、本質軸に該当する意見の児童が 16 名と最も少なかった。道徳的価値への理解、思考の深化を促進するため、内容項目へと立ち返る活動を取り入れる、学習課題を本質的な問いにする必要があったと考えられる。3 軸以上に該当することを多面的・多角的な思考と捉えたとき、児童の半分以上が多面的・多角的な思考を行っていたと考えられる。

5 1 年次と 2 年次の成果と課題

大学院 1、2 年次の授業実践より、以下の成果や授業づくりの改善点が示唆できる。1 つ目は、授業者が行う学習活動のタイムマネジメントと発問の工夫である。1 年次に行った授業では、振り返りに十分な時間を設定できなかった。しかし、2 年次では学習活動の進行方法を工夫したことで、時間に余裕を持って振り返りを行えた。1 年次の授業では、児童の意見を板書にまとめることや、児童の考えやすい発問を提示することが不十分であった。2 年次の授業では、授業デザインを見直した上で、発問の意図を明確にし、児童の返答を予測して返答しやすい内容に修正した。こうした発問の方法を変更することで、1 年次に比べて児童の返答の改善が見られた。

研究上の課題は役割演技への児童の参加の偏りである。演じた時間は 3 回の合計で 10 分を超えた。演者の 3 人は休む暇なく活動し続けていた。

その一方で、聴者は似通った演技を 3 度繰り返して見ており、役割演技の回数が増えるにつれ、下や横を向く児童が増えた。授業時間における役割演技の配分、効率よくテーマを思考できる導入方法の検討が課題である。

6 おわりに

児童が多様な価値を見出せるようにするために、意見交流や協同学習が重要であり、役割演技が有効であった。役割演技により、児童は登場人物の心情や行動を深く理解し、道徳的価値の理解が深まることが示唆された。

道徳科では、児童一人ひとりの経験や考え方によって、多様な価値を見出せる授業づくりが重要と考えられる。道徳科の授業において、児童一人ひとりが多面的・多角的な考え方ができるには、児童同士の意見交流や協同的な学習の機会を取り入れることが有効であった。児童同士の意見交流や協同的な学習機会として、役割演技があった。教材を読むだけでなく、多面的・多角的な考え方が生じる場面に、役割演技の手法を計画的に取り入れることが有益であった。KJ 法や 4 軸を用いた分析で見たように、役割演技は、児童が実際に登場人物を演じたり役割を交代したりといった直接的な体験をすること、児童同士や役割を演じて交流することを促した。登場人物の役割を演じることで、登場人物の心情やどう振る舞えばよいのかの対処や判断を促し、道徳的価値の理解を深めたと考えられる。今後の課題は、教材ツールや発問が実際に児童の多面的・多角的な考え方を高めるのか、なぜ高めるのかの要因の分析である。

引用文献

- 荒木寿友 (2013) 学校における対話とコミュニティの形成—L. コールバーグのジャスト・コミュニティの実践—。三省堂。
- 浅見哲也 (2020) 道徳と教育, 338, 77-87.
- 早川裕隆 (2017) 実験的に理解を深める！体験的な学習「役割演技」でつくる道徳授業—学びが深まるロールプレイング—. 明治図書。
- 飯田さくら (2020) 和歌山大学教職大学院紀要, 5, 169-177.
- 岩瀧大樹 (2009) 学苑, 826, 42-53.
- 川喜田二郎 (1997) KJ 法入門コーステキスト 4.0. KJ 法本部川喜田研究所。
- 松下一世 (2015) 佐賀大学文化教育学部研究論文集, 19, 37-51.
- 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説「総則編」. https://www.mext.go.jp/content/220221-mxt_kyoiku02-100002180_001.pdf (2025 年 2 月 1 日閲覧)。
- 押谷由夫・立石喜男 (1991) 思いやりの心を育てる。明治図書。
- 押谷由夫 (2018) 多面的・多角的な考えを引き出す道徳授業とは。道徳教育, 722, 4-7.
- 山田 洋・園田貴章 (2016) 佐賀大学教育実践研究, 33, 415-418.